

タリタ・クム

——手を取ってくださるイエス

マルコ 5 : 22 - 24、35 - 43



司祭 ヨハネ 井田 泉

2018年7月1日  
聖霊降臨後第6主日

奈良基督教会にて

カファルナウムの町には会堂がありました。会堂とはわたしたちの礼拝堂と似たものです。安息日、当時は土曜日の礼拝の場所です。ここが生活の中心です。聖書が朗読され、その説き明かしがなされ、信仰者としてどのように掟を守って生きるべきかが語られます。他に会堂は、子どもたちに聖書を教える学校として、また裁判の場所としても用いられたそうです。会堂には責任者として会堂長がいました。会堂長は聖職者ではないのですが、礼拝に責任を持ち、聖書の朗読者と説教者を選び、礼拝が本来の精神や伝統にかなうように気を配ります。カファルナウムの会堂には会堂長が複数いたようです。その会堂長のひとり、ヤイロという人がイエスのもとに来て、ひれ伏して懇願しました。

「わたしの幼い娘が死にそうです。どうか、おいでになって手を置いてやってください。そうすれば、娘は助かり、生きましょう。」マルコ 5:23

「手を置いてやって」とは、手を置いて祈ってほしいのです。イエスさまだけが頼りです。「わたしの幼い娘が」と言っていますが、後で分かるのですが、その子は 12 歳です。「幼い娘」というと 3 歳から 5 歳くらいをイメージしてしまうかもしれません。けれどもこの父親ヤイロにとっては、自分の娘はいつまでもかわいい。幼い頃にその子を呼んでいた愛称があったとすれば、もう大きくなってその愛称は直接使えなくなったとしても、心の中では繰り返しその愛称で呼ぶのです。まして今、この子は命が危ない。「わたしの幼い娘が」という言葉はヤイロの気持ちそのものです。

イエスはヤイロと一緒に出かけられました。途中別のことがあってしばらく時間を取られました。そこへ会堂長の家から人々が来て言いました。

**「35 お嬢さんは亡くなりました。もう、先生を煩わすには及ばないでしょう。」**

イエスはその話をそばで聞いて、「恐れることはない。ただ信じなさい」と会堂長に言われました。イエスは3人の弟子だけを連れて、娘の家に向かわれます。絶対にその子を生かす、生き返らせる決意です。

家に着くとたくさんの方が集まっていて泣いたり騒いだりしています。イエスはその人たちを外に出されました。この子を生かすために本気で祈る人だけが必要なのです。お父さんのヤイロと、娘のお母さんと、3人の弟子だけを連れて、イエスは子どものいる所に入って行かれました。

そこでイエスは**「子どもの手を取って……」**

イエスはその子の手を取られました。ちょっと触られた程度ではありません。ぎゅっと握りしめられた。この子を死の力には渡さない。あなたはわたしのもの。わたしの命の中にこの子を呼び入れる。

そして**「タリタ、クム」**と言われました。アラム語、イエスの肉声です。

**「タリタ、クム」 少女よ、起きなさい。**

少女に命が戻って来て、自分のほうからもイエスの手を取って、起き上がります。ベッドから下りて、歩き始めます。

このようなことはあり得ない、とって放棄しないようにしましょう。大事なことは、イエスがこの子を生かすと決意して行動されたことです。それが第一です。

第二に、イエスはこの子の手を取られました。単に取られたのではなく、この子の命は他には渡さない。この子はわたしのものとして守る、という決意をこめてこの子の手を握られたのです。

他人事ではありません。イエスは、わたしたちにも同じように決意を持って近づいてくださり、わたしの手を握ってくださるのです。そうするとどうでしょう。わたしのほうにはやがて変化が起こります。イエスによって握られたわたしの手は、イエスの手を握り返します。イエスがわたしを生かそうとされる愛の決意とともに、イエスの命がわたしの中に入って、わたしを立たせます。自分では立てなかったのに、自分から立つように変化していくのです。そのような変化の始まり、決定的な始まりが、洗礼です。

今日、イエスさまがひとりの方の手をしっかりと握られます。そしてその方をご自分のものとして愛し、守りとおされる決意です。その方もイエスさまを信じて、これからイエスによって生かされて生きて行かれます。そのような洗礼という祝福の場所に、今日わたしたちは共にこれから立ち会います。

主イエスさま、あなたは生かす決意をもって女の子の手を取り、生命へと呼び戻されました。どうかあなたがわたしたちの手をも取って力づけてください。わたしたちにも、人を生かそうとする思いと働きをお与えください。アーメン